

【タイトル】

月の筏

【著者名】

陶本岬

【あらすじ】 133字

俺と梓は湖畔で絵を描き、コテージで語り合う。一年前に梓の個展で再会したとき、彼は夢を諦めようとしていた。一緒に絵を描くことにしたのは、梓の作品を見て、彼を離してはいけないと思ったからだ。兄としての自分を振り返った俺は、湖に浮かぶ月の筏を見て、梓を新たな旅に送り出す。

【特記事項】

額縁の外側のように、描かれていない部分の広がりを感じられる作品を目指しました。

【本編の文字数】

4763字

緑をもう少し淡くしたくて白い絵の具を混ぜたら、霞がかった森が生まれた。

梓は少し離れたベンチに座って、真剣な表情で筆を動かしている。少し傾いた太陽が横顔を照らして、彼の影が俺のスニーカーに触れた。そんな些細なことでさえ大事に守っておきたくて、ペインティングナイフでキャンバス上の霞を薄く広げ、包み込む。

湖畔の広場には、近くのアスレチックで遊ぶ子供たちの声が届いて、それを聞いているうちに、小さな花の集まりも描きたいなと思った。

美術大学出身の梓と違い、俺はスケッチの基礎なんかをしつかり学んだことがなく、たぶんセンスもないのだが、何はともあれ挑戦だ。参考になる花は近くにはないだろうか。俺は立ち上がって花を探すついでに、梓の絵を覗きに行った。

梓の瞳を通したら、世界はこんなふうに見えるのだろうか。ふわふわとしたタッチだけれど、微細な陰影が、目の前の風景を立体的に再現していた。でも、その中で、実際には存在しない筏が水面に浮いている。背中を向けた誰かが乗っているようだ。

梓の絵にはいつも生き物が描かれている。

再会は一年前、梓の初めての個展だった。

平日の仕事終わりに立ち寄ってみると、小さなギャラリーにはパステルカラーの柔らかい世界が広がっていた。壁にかけられた作品を順番に見ながら奥へ進んでいくと、知っている声が耳に入って、そちらに意識がいく。久し振りに聞く梓の声は、誰かに作品の説明をしているようだった。

自分が場違いのような気がして、会わずに出ようかと早足になったけれど、ある一枚の作品の前で、俺は動けなくなってしまった。

その絵は『実家』というタイトルで、説明書きは一切無い。白い空間の中央にぽつりと浮いた一軒家の外観は、間違いなく梓の実家だ。その横に、やさしい目をした巨大なキリンが座り込んで、まるで家を守るように長い首を回していた。

「なっちゃん？」

先程まで遠くに聞こえていた声が突然背中に掛けられて、振り向くと、くちやくちやの笑顔をした梓がいた。

「おう」と答える間に、梓は目の前までやって来た。

「来るなら言つてよ！びっくりした」

「間に合うか分かんなかったから」

梓の「そっか」とちよつと顎を上げて満足げに笑う仕草を懐かしく感じたけれど、俺の記憶にある姿よりも随分痩せたようだから心配になる。背が高くて顔も小さいのに、痩せてしまうと余計に——キリンみたいだ。

突然、喉の奥が、ぐつと詰まるような感じがして、何と言いつつ表したら良いか分からないう、もどかしい気持ちに潰されそうになった俺は、無意識に自分の手を見つめていた。

「梓、俺も絵を描いてみたい」

顔を上げなくても想像できる。梓は大きな目を見開いて、俺の意図を探っているに違いない。

数年振りの再会で、なんの経験もない自分みたいなやつが軽々しく言うことではないのに、俺は撤回しなかった。

「描こうよ」梓ならそう言うだろうと、分かっていたから。「一緒に描こう」

それから梓と俺は月に一度のペースで会うようになり、ひたすらに絵を描いた。大抵は梓の部屋か、彼が友人と一緒に借りているアトリエ。

今回みたいに、遠出して絵を描くのは初めてだ。

時間を忘れて夢中で描いているうちに西日が強まってきた。完成した絵を近くのウッドテーブルに置いて片付けを始めると、梓も一段落ついたのか動き始めた。それぞれ乾いていない絵を慎重に持って、ほとんど何も話さずに、宿泊先に向かって歩き出す。

丘の上まで上りきると、十棟ほどのコテージが間隔を開けて並んでいる。二人ともアウトドアには疎いため、梓が予約してくれたのは初心者でも利用しやすいというキャンプ場だった。小さなコテージだけれど、トイレや風呂を完備していて、不自由なさそう

だ。

夕食に慣れないバーベキューまでして、すっかり満足したような顔で風呂から上がった梓は、髪も乾かさずにソファに沈み込んだ。そして、手持ち無沙汰な様子で、ローテーブルに置いてあった俺の絵を手を取った。目の前で作品を見られるのが気まずくて、冷蔵庫を開けるために背を向けると、梓が言った。

「やっぱり、なっちゃんの絵、好きだな」

俺はペットボトルのミネラルウォーターを取り出して、フタを開けながら振り向いた。「それはどうも」

ちよつと頭を下げたら、なぜか梓の方が恥ずかしそうに視線をそらして、また絵を見つめた。

「なっちゃんって普段何考えてるのかよく分かんないけど、こんな風に心が動いているんだなって思う」

俺はペットボトルを冷蔵庫に戻すと、描きかけのまま置かれている梓の絵を見た。

湖に浮かぶ筏がどこへ向かうのか、真相は分からない。俺たちは正反対みたいだ。梓は昔から感情表現が豊かだけれど、作品を見ると、かえって彼れが分かんなくなる。俺たちはお互いの絵に対して感想を言い合ったり解説を求めたりせず、ただ、同じ空間で一年間描き続けただけだ。

「想像した通りに描けないと落ち込んだり、この道しかないはずなのによって自分を追い詰めたりしちゃうけどさ」梓は濡れた短髪をくしゃくしゃかき混ぜながら、熱い瞳をま

っすぐに向けてきた。「なつちゃんの絵を見ると、ただ描きたいから描くんだっていう気持ち、思い出せる」

俺は何と返したら良いか分からなくて、下手くそな作り笑いをした。そうして、タオルと着替えを抱えて、風呂場へ向かって歩きながら、弱々しく伝えてみる。

「梓の絵が、俺を変えたんだよ」

言い捨てて、後ろ手に脱衣所のドアを閉めようとしたら、大きな声だけが追いかけてくるみたいにして滑り込んできた。

「なつちゃんって、なんだかんだで俺の兄貴だよな」

その言葉はなんだか嬉しそうな声色で、きつと両手を上げて伸びでもしながら発したのだろうと思われたけれど、俺は服を脱ぎながら、鼓動が早まるのを感じた。

俺はなんだかんだで梓の兄貴なんだ。

「梓、今回の個展を最初で最後にするかもって。見に行つてあげたら」

一年前の、あの夜、母さんがリビングで独り言みたいにそう呟いたのは、たぶん俺じやなくて父さんに伝えるためだったのだろう。

でも、飯を食べながら何気なく聞いていた俺の方が、驚いて噎せてしまった。そこで何を言つたって仕方ないから父さんと同じように黙っていたけれど、本当は「なんで？」をぶつける場所を探していた。

梓が父さんに夢を否定され続け、家を追い出されて浪人生活しても俺は励まさなかつたし、美大を卒業して舞台美術の会社に就職しても祝わなかつた。理解できないくせにと思われるのが怖くて、逃げ回っていた。

そうして、逃げ回った先のギヤラリーで、実家に入れないほど大きくなってしまったキリンが、窓からそつと俺たちを見守っているのを知つた。「なんで？」をぶつけることなんてできなくて、それでも離したくなくて、一緒に絵を描いてみることにした。

「なんだかんだで兄貴」になれたのは、たぶんそれからだろう。

寝る支度を終え、電気を消してベッドへ入る。シーツがひんやりとして、ちよつと縮こまる。梓はベッドの真上に位置するロフトで布団にくるまっているけれど、まだ起きているようだ。

ふと思いついて、俺は梓に話しかけた。

「昔さ、漫画のキャラが野宿してるのに憧れて、ベランダで寝るとか言い出したことあったよな」

梓が、ぶつと吹き出した。覚えていたみたいだから、俺は嬉々として続ける。

「母さんと俺は、ちよつと寒い思いしたら満足するでしょとか言つてただけだ。梓がベランダに布団敷いてるところに、父さんが帰ってきてき」

話すより先に記憶が蘇ってきて、笑いで声が震える。どうにか続けようとしたけれど、次の瞬間、梓が低いガラガラ声で怒鳴つた。

「地べたに布団敷いて寝てる漫画どれだよ！持ってこい！」

父さんの声真似が上手すぎて、腹筋が痛むほど笑ったら、身体もすっかり温まった。笑いがおさまって、「あーあ」とため息混じりに余韻を感じると、静けさが心地良い。

「額縁みたい」

しばらくして、梓が小さく呟いて、向かいの壁に嵌められた窓を見ているのだとすぐに分かった。カーテンは開け放たれたままで、その向こうは暗闇なのだが、目を凝らすとちらほらと星が見える。今夜は快晴だから、外に出ればもつと良く見えるだろう。

「宇宙が四角く切り取られてる」

梓の声は、今にも寝入りそうな色をしていた。俺の反応がなくても、ぽつりぽつりと話し続ける。

「四角の外側は描かれてないけどね、天の川を宇宙船が川下りしてる」

こんなふうに想像しながら眠って、今夜は宇宙旅行の夢でも見るつもりだろうか。寝言ではなさそうだから、俺は「へえ」と掠れた声を出して、続きを促した。

「オリオン座の砂時計がくるくる回って、ばらまかれた星の砂が流れて、今頃さつきの湖に浮かんでるだろうな」

気が付いたら、話を聞きながら瞼を閉じていた。窓枠の外側に想いを馳せて、どうしようもなく絵を描きたくなかった。俺には自分の世界を表現するとか大それたことはできないけれど、感じたことを残すために絵を描いているのだと、初めて自覚した。

目を開けたときには、梓はもう黙っていた。

「逆に言うと、額縁って窓みたいだよな」俺は天井を見上げて、その向こうにいる梓に語りかけた。「額縁の中ってよく言うけど、額縁の向こう側って言った方がしっくりくると思う」

ある一部分が覗けるようになっていてだけで、額縁の向こうには広がりがある。静かな宇宙のように。

返事がない。

「寝てるな？」

あまりにも静かだ。

ベッドでじっとしていても眠れそうになくて、外を歩くことにした。

遊歩道までやってきて、真っ黒になった夜の湖を見下ろすと、大きな半月が筏みたいに浮かんでいた。海につながっていない湖から旅に出るには、月の筏で飛んで行かないと、なんて梓は考えそう。

梓は、もうすぐニュージールランドへ旅立つ。

個展をきっかけに知り合った人が現地のギャラリーに伝手があり、絵を続ける気があるなら、アルバイトをしながら武者修行しないかと誘われたらしい。

離れたくないという思いで一緒に絵を描きはじめてのに、もつと遠くへ送り出すことになってしまった。

コテージへ戻ると、ダイニングテーブルにランタンの灯りを置いて、スケッチブックにパステルで色を重ねた。今日という一日、一緒に描いた一年、梓が生まれてからの二十六年。色んな想いを重ねた。

「何これ！いつの間に！」

アラームみたいな大声に起こされて、細く目を開けたら、寝癖だらけの頭をした梓がダイニングテーブルを指していた。

欠伸をしながらベッドから下りると、梓は急かすようにして、軽くテーブルを叩いた。「これ貰っていくから、サイン入れて」

俺が夜中に描いた絵のことを言っているみたいだ。

「この辺とかに。好きな色で。お願い」

寝起きで頭が回っていないのもあり、眉をひそめて梓を見る。上下揃いのスウェットがいかにも寝巻きっぽくて、駄々をこねる姿がまるで子供だ。

「こんなもんだうすんの」

「額縁に入れる」

俺はテーブルに置いたままだったパステルの箱から水色を手取る。本当はもつと落ちて着いてやりたかったけれど、梓は待ってくれないだろう。

右下の隅に小さく NATSUKI と書いた。初めてのサイン。ぺらぺらのスケッチブックだけれど、たしかに特別な気分がする。

俺がパステルを片付けて、洗面台に向かっている間も、梓はずっと絵を眺めていた。蛇口を回しながら、ダイニングに向けて言う。

「出発する日、空港に父さん連れていくから」

「別に、いいよ」

顔に冷たい水を浴びせていても、梓のもごもごした返事は聞こえた。

「絶対に連れていくから」

水を止めて、タオルに顔をうずめながらダイニングへ戻る。なんだかんだで兄貴だしなんて言うのはやめておいて、顔を上げたら、梓はひよろつとした身体でスケッチブックを抱え、くちやくちやの笑顔をして立っていた。